

## 郷土芸能でつづる「ふるさと鳥取の四季」

### 出演団体紹介

#### キリノロジークラブ（麒麟獅子舞）

麒麟獅子舞は、鳥取県東部・因幡地方に分布し、江戸時代に鳥取藩初代藩主池田光仲公が始めたといわれています。「麒麟」は中国で生まれた想像上の動物で額に一本の角を持ち、生草を踏まず、生物を食べることのない思いやりのある聡明な動物とされています。

キリノロジークラブは、1992(平成4)年から、とっとり駅前商店会のまちづくり運動を行っているほか、1994(平成6)年にニューヨーク、1999(平成11)年にベトナム、2002(平成14)年9月には、その前年の同時多発テロ犠牲者追悼のため、再びニューヨークで公演するなど、鳥取県独特の麒麟獅子舞を世界で精力的に披露しています。

なお、この麒麟獅子とその先導役の猩々は、8月全国ロードショーの角川映画「妖怪大戦争」に登場します。

#### 国府町因幡の傘踊り保存会

鳥取市国府町に伝わる長柄の傘を使い剣舞のように舞う踊りです。整然とした様式美と力強い鈴の音が印象的な因幡の傘踊りは、江戸時代後期の早魃の際に、花笠を持って踊られた雨乞い祈願の踊りが原型で、明治時代末期に国府町高岡の山本徳次郎が従来の傘踊りに剣舞の形を取り入れて考案したものです。

傘には小鈴100個以上が付けられ、揃いの浴衣に手甲、脚絆、白鉢巻きに白だすきの若者のいでたちで、勇壮に踊ります。

鳥取市横枕に伝わる傘踊りとともに鳥取県無形民俗文化財に指定されています。

なお、貝がら節は、鳥取県沿岸でイタヤ貝を採っていた漁師の労働歌をもとに、昭和初期、高浜虚子門下の俳人・作家の松本穰葉子が歌詞を手がけたもので、現在では、鳥取県を代表する民謡として知られています。

#### 倉吉市高城牛追掛節保存会

牛追掛節の起源は、豊臣秀吉の大阪城築城に当たって、全国から集結した人夫が牛に石や材木を曳かせて運ぶ重労働を唄いながら忍んだものとされています。牛市で賑わっていた中国地方最高峰の大山の博労座では、江戸時代から牛追掛節が唄われていました。牛市とともに牛追掛節も衰退していたところ、1928(昭和3)年に東京日本青年館で開催された第3回郷土舞踊民謡大会に当時倉吉市高城地区の若者が一念発起して出演し注目を集め、その熱意を現在の倉吉市高城牛追掛節保存会が引き継いで、脈々と牛追掛節を継承しています。その歌詞では、鳥取県の豊かな自然が歌われています。倉吉市無形民族文化財に指定されています。

#### 米子がいな太鼓保存会『匠』

「がいな」とは、米子地方の方言で「大きい」の意味。がいな太鼓は、1974(昭和49)年に創始され、四半世紀の歴史を積み重ねてきました。現在では、200名を擁し、県内随一の規模を誇ります。真夏の米子がさらに熱く燃えあがる「米子がいな祭」では、米子っ子の魂を揺さぶるリズムを響かせます。

演奏曲は音楽性が重視されていて、組曲のように幅広い展開が聴衆の心を惹きつけます。武道を連想させる勇壮な所作が、太鼓の音色とリズムを一層惹きたてます。がいな太鼓は全身全霊の魂の響きです。

#### 淀江さんこ節保存会

さんこ節は、安来節の元唄とも言われ、七七五調の歌詞で、今なおその古い調べを残しながら、鳥取県内の港町で歌い継がれてきました。その由来には諸説がありますが、その調べから九州地方のハイヤ節の系統を引き継ぐものではないかと言われています。淀江さんこ節の起源は、「花の様なる 巳之助さんは 惜しや淀江の焼け町に」と唄われた元禄12年の淀江大火まで遡ります。その軽快なテンポに合わせて、踊り手が左官に扮し、土練りと壁付けの作業を滑稽に演じる「壁ぬりさんこ」という仕種踊りがあり、酒宴の席で舞われてきました。米子市無形民俗文化財に指定されています。

#### 多里田植唄保存会

鳥取県の南西部・広島県境に位置する日南町多里集落で花田植の習俗が廃れていくのを惜しんだ人々が、1951(昭和26)年、日南町文化祭で芸能として再構成して公演したことを契機として、多里田植唄保存会が自然発生的に結成され、現在まで伝承しています。花田植は、当地では古くから行われ、1398(応永5)年に僧了阿が描いた「大山寺縁起絵巻」にもみることができます。

芸能としての田植唄は、花田植当日の作業順序と同じ構成となっていて、田植の始まりから終わりまでの農作業が盛り込まれ、アドリブを含む軽妙で滑稽な会話を交えて展開されます。農業の機械化や減反政策でなくなった往時の農村の姿が忍ばれる芸能です。